

働き方については、成果が出せるならば特に場所は関係ないと考えている。CEOも例外では無く、今は東京にいる事が多い状況である。



Planetway Corporation 訪問の様子

VI. 團 員 雜 感

アジアの枠を踏み出してみて

これまで海外といえば、中国をはじめとしたアジア圏ばかりであったが、今回は EU圏に一気に足を延ばすということで、一抹の不安と未知への期待、そして延べ9日間という期間の後に待ち受ける帰国後のハードスケジュールが頭を過ぎりつつも、同行の諸氏とも事前に酒席の力で打ち解けられていたことが、この視察の満足感を高めるのに役立った。

今回訪問したリトアニア・ラトビア・エストニアのバルト3国は、近年注目されてきてはいるが、旧ソ連からつい最近独立した国というレベルの知識しかない自分には、馴染み薄い国々であった。しかし、実際に訪問してみて意外に感じた一面もあった。

何より天気にも恵まれ、視察団全身体調を崩すこともなく元気で帰国し、自身も視察期間中に特段不自由を感じる事がなかったことは良かったと思う。

◆第1訪問国 リトアニアで

リトアニアの朝は山崎駐リトアニア大使との会食で始まり、訪問先企業での経済副大臣の飛び入り自国宣伝も踏まえ、日本・リトアニア両国ともに関係強化を図っていく意思が双方に強くあることが良く分かった。やはり「杉原千畝」氏の功績は大きい。

◆第2訪問国 ラトビアで

首都リガはハンザ同盟の下で栄えた歴史と文化を感じる一方、旧ソ連の抑圧の歴史も感じる街でもあった。また、イギリス人がこの国でスタートアップした点は意外だったが、3カ国に共通した人件費が安いという点は十分に理解できる重要な要素だ。

綜研化学（株） 泉浦 伸行



◆第3訪問国 エストニアで

一番の驚きは訪問先企業に若い日本人女性が勤務していたこと。また、次訪問先企業は日本人がスタートアップしたことも意外であった（本社はアメリカだが）。世界の中での日本の存在感、日本に対する世界の期待は自分が思っている以上に高いのだと感じた。

これら3カ国がIT先進国と言われる要因を考えるに、資源が無い、国土が狭い、人口が少ない、重工業が弱いなどの弱点と思われる点を逆手に取り、国家としての進むべき方向を重厚なインフラ等を必要とせずとも済み、成長が見込めるIT分野に求め“人間の鎖”に象徴される人の力の連携に活路を見出そうとしたことにあるのではないかと思う。

今回の視察から、日本も真似るべきと感じた点に、外国語教育がある。3カ国とも英語が日常的に通用する。EU圏内だから当然と見る向きもあるだろうが、独立し30年にも満たない国である。日本は企業のグローバル展開が進む中、英語などの外国語教育に一層注力すべきだと痛感した。また、国自体が小さいこともあるが、IT活用の効率的な行政で、小さな政府を実現している点は、大いに真似るべきである。さらに、訪問先企業に共通した社員を大切にする姿は、日本が大事にしてきた筈のことで、今回その重要性を再認識できた。

最後に、アジアの外に初めて踏み出して訪れた国が何れも豊かな自然に恵まれ、誇るべき歴史と文化を持つこの3カ国であったことに感謝する次第である。

バルト3国視察雑感

今回、バルト3国のリトアニア（ヴィリニュス）、ラトビア（リガ）、エストニア（タリン）の街と企業を訪問する機会をいただいた。こんなことでもなければ、一生、縁がなかったであろうバルトの国々だが、たいへん興味深い経験をさせていただいた。

リトアニアでは、まず第2の都市カウナスを訪問。ここは、「命のビザ」で有名な杉原千畝氏の記念館を見学。杉原氏の武士道精神に基づく人道的な行為は、リトアニア国民の親日感情のなかに貴重な遺産として息づいている。逆にロシアに対する反感は色濃く残っていることがガイドさんの言葉の端々からも感じられた。杉原氏が外務省の官僚（組織人）としての立場と、個人の立場との狭間で苦悩しながら、最後は人道的な立場での勇気ある決断をするに至ったことに思いを馳せた。

首都ヴィリニュスは、世界遺産の街並みがたいへん美しく、ちょうど紅葉と屋根のレンガ色との絶妙なコントラストに感動。また、企業訪問時の通訳のラオーリナスさんは、北大に留学していた長身のイケメン。「世界！ニッポン行きたい人応援団」に出演するかもしれないとのこと。どうぞ期待！ 訪問企業のCEOの方々を含め、とにかくリトアニアの人たちは長身の美男美女揃いでビックリ。

ラトビアの首都リガで印象的だったのは、アールヌーヴォーの街並み。その一方で、旧ソ連時代の朽ち果てた建物も多く目にした。バルト3国の中では最もロシア系人口の比率が高く

(株) ミライト 伊藤 史典



(約26%)、ロシアの影響を強く感じた。明治維新150年の今年、日本海海戦のバルチック艦隊の出航地であるリエパーヤのあるラトビアの地を踏んだのも何かのご縁か。

エストニアは、バルト3国の中でも最も人口が少なく（約132万人）、青森県とほぼ同じとのこと。私も青森で育ったので、北欧の寒さも含めたいへん親近感を持った。

1991年の独立以降、「e-エストニア」を旗印に国を挙げてIT化を推進し、99%の政府サービスがインターネットで手続き可能というIT大国を実感。国民の個人情報に容易にアクセス可能だが、いつ誰がどんな目的でデータにアクセスしたかのログを残すことで、トランスパレンシティ性とセキュリティ性を両立しているとのこと。個人情報の秘匿性に神経質な日本では、なかなか考えられない。個人情報に他人がアクセスすることについては、旧ソ連だったこともあり、日本などに比べて少しおおらかなのかなとも感じたが、このくらい徹底しないと電子政府やIT化なんて進まないのかな、とも思う。EUの一般データ保護規則（GDPR）との関係でやりにくいことになるのかどうか、今後の動向に注目したい。

いずれにしても、人口が少なく、大国の狭間で辛酸をなめてきたバルト3国だが、それぞれの持ち味を活かして、山椒は小粒でピリリと辛い、小さくても光輝くEUの真珠を目指し、これからもがんばっていただきたい。

バルト雑感（第40回欧州企業視察団に参加して）



(株) 電業社機械製作所 伊藤 誠剛

バルト3国。不凍港を抱えるこの地は長いこと大国、特に帝政ロシアからの影響を抑圧という意味で強く受けてきた。1918年に一度目の独立を宣言したものの、1940年からドイツそして再びソ連に併呑され続け、1991年ようやくにして2度目の独立を成し遂げた。その地を今回訪問することが出来たので企業視察とは別に心に残る場所と風景を、主観を交え簡単に紹介する。

1. リトアニア カウナス・トゥラカイ

日本からリトアニアに入国する人数は年間およそ2万人強。同国を訪れる日本人の大多数はここを目的としているであろうというカウナス杉原記念館から視察ツアーは始まった。ご存じ日本のシンドラーといわれる元領事官杉原千畝氏を記念した資料館である。本国の許可なく人権に対する自身の信念に基づき難民(その多くがユダヤ人だった)に対しビザを発給しつづけ、多くの人命を救ったことで知られている。

トゥラカイ城はリトアニア史上最強だった大公国時代の首都であった場所にたてられた城である。ルコス湖の中島にあり、次回は月明かりの下で見たいと思わせる美しいたたずまいの城である。

2. ラトビア リガ

バルト3国の中では文献上最も古い街である。ハンザ同盟の中心的街として役割を果たし、その歴史から政治・文化ではなく商都として存在感を示していた。第二次大戦の際にはドイツ系貴族はナチスの陸軍へ、一般国民はロシア陸軍に入り、戦場では同胞相争うこととなり、ドイツ系は敗戦によって、ロシア系はスターリンの契約不履行によって働き手の3分の1が失われたともいわれている。

リガ最大の高さ120メートルを誇る聖ペテロ教会の中間展望台から景色を眺めると360度地平線であり、いかに平野部が多いかが分

かる。バルト3国での最高峰は316メートル、東京タワーより低い土地が北海道の約2.2倍の広さでつづいている。

3. エストニア タリン

エストニアでは5年に一度歌の祭典という祭りがあり「歌の広場」という施設に数多くの合唱団が集い観客と共に数日間歌い踊りあかす。1991年独立のきっかけのひとつがこの広場におよそ30万人、エストニア民族の3分の1が集まり、『自由』を求める歌の合唱が繰り広げられたことである。ここエストニアでは30万人の歌の力によって武装勢力を排除し、無血での独立を成し得たことが誇りとなっている。歌の力を信じるエストニア人にとってここは独立の記念碑的存在となっている。

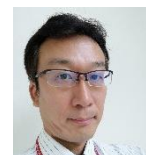
タリンの街中にはまさに今、いたるところに『18』という道路標識が建っている。1の右の8の字は「〇」が二つになっている。これは1918年独立の18、今年2018年の18、そして独立100周年を祝う100を意図したデザインである。冒頭1991年を2度目の独立と記載したが、バルト3国にとって独立とはあくまで1918年であって、1991年は『自由』を求めそれが成し遂げられた年と考えるのが適切なかもしれないと思わせる。

4. おわりに

IT先進国といわれるバルト3国を訪問して思ったことは、いずれの会社も進取の気性に富んだ企業が多いということである。戦後日本が「モノづくり日本」で急成長を遂げたように、バルト3国もITという時代の流れに乗って急成長を遂げる可能性を感じた視察であった。今回このような貴重な視察の機会を与えていただいた東京経営者協会の皆様と当社関係各位、そして貴重な体験を楽しく過ごさせていただいた団員各位に深く御礼申し上げる。

バルト 3 国欧州視察を終えての雑感

トッパン・フォームズ（株） 田村 勝



私にとって初の欧州が今回のバルト 3 国であった。この欧州視察は私の日常生活からはあまりにもかけ離れていた事も有り、とても刺激的であった。各国の印象と I T について感想を述べたい。

■リトアニア

事前情報として「杉原千畝」の影響もあり、親日的であると伺っていたがその通りであったと思う。触れ合った人々、企業訪問の中で伺った内容を含め、穏やかで努力家の印象が強く残った。宗教の影響も有ると思うが旧支配者であったロシア人が少なく、国内で頑張ろうという性格なのか政府、企業、大学が密に連携し I T 産業を盛り上げていた。賃金格差のため人材を輸入出来ない事情もあるかもしれないが、印象としては島国の日本と似ていると感じた。訪問した I T 企業では自国で育てた I T 人材の流出を食い止めるため、先進的で魅力的な仕事の提供や労働環境に気を使うなどの苦勞が伝わってきた。

■ラトビア

アールヌーボー建設物の見学から始まったラトビアはリトアニアに比べると発展的であり、そして裕福な都市の印象を受けた。港町であるリガの影響からロシア人をはじめ、各国の人種が入り交じっていた印象である。訪問した企業でもイギリス人 CEO もおり、ラトビアの EU における国の位置や安い人材を求めて起業していると感じた。また今回はラトビアにおける印刷市場の状況を聞く機会に恵まれた。印刷業界（特に出版）自体は縮小だが、印刷後の後工程（手作業）においてはスカンジナビア半島各国のアウトソース先として需要がある（伸びている）事を聞いた。I T 以外は EU 圏において、まだ労働賃金が全体的に低い事を知り得た。

■エストニア

旧市街全体を世界遺産として保有しているエストニアは、今回の訪問先において人口が一番少

ないとの事だったが一番活気がある印象を受けた。スカンジナビア半島からの交通の便も良く、日本人観光客も見ることが出来た。補足として今回のバルト 3 国ではアジアの観光客（特に中国人）はとても少なかった。今回の訪問先で一番興味があったエストニアの電子政府の紹介（e-Showroom）はとても刺激的であった。システムは勿論だが個人情報に対する考え方がオープンであり、便利になるのであれば採用しようという考えが伝わってきた。またもう一点注目したい事があった。それはシステムを構築しても使用しなければ意味が無いとし、国民への I T 教育を根気よく実施していた事だ。私もシステムに関わるものとして共感する。

■全体を通して

今回は会社の好意により iPhone を使用し、各国でローミングしながらインターネットを利用した。もちろん 3 国とも利用できたが、なぜかラトビアだけ接続が切れやすかった。エストニアでは Cafe をはじめ多くの施設に Free Wi-fi が設置されている説明を受け、実際に利用している方を多く見た。I T 先進国の庶民の生活は評価が難しい。カードによる支払いはもちろん普及しているが、都市の中心部は歴史のある建造物を外見はそのままオフィスに使用していた。そのため古い建物が多いと感じた。コンビニはほとんど無かった。治安は良く 3 カ国とも綺麗な国だった印象が強い。

東京経協様主催の欧州訪問は団長をはじめ他社の方々と同行ができ、また初めての欧州そして海外 I T 企業の訪問を含めとても有意義で楽しく過ごすことができた。最後に、主催して頂いた東京経営者協会の方々をはじめ、快く欧州派遣に送り出して頂いた職場の皆様に深くお礼を申し上げます。

バルト3国訪問の雑感

アイエックス・ナレッジ（株） 小岩 純



今回、第40回欧州企業視察団に参加させていただき、バルト3国を訪問するという大変貴重な機会を得ることが出来た。ここでは、バルト3国と訪問先のそれぞれの印象・感想を率直に述べたい。

1. バルト3国について

リトアニアについては、森と湖が多いのどかな地域が多く、また首都ビリニュスには旧市街地の琥珀色の屋根が並び、とても美しい景観であった。

また非常に親日的で、これは第二次世界大戦中に“命のビザ”を発給し、ナチスドイツから多数のユダヤ人を救った杉原千畝氏の功績が大きいことが理由だろう。今回、カウナスにある杉原千畝記念館も訪問することができた。2年前にポーランドのアウシュビッツ強制収容所に行ったことがあるが、部屋一面に刈られたユダヤ人の頭髪やガス室、処刑場など衝撃的を受けた光景を思い出した。戦時中に日本政府の訓令に反し、ビザを発給することは決死の覚悟であっただろうが、彼の勇氣ある行動が6,000人以上ものユダヤ人を強制収容から救ったことは、同じ日本人として誇りに思うとともに、改めて戦争の意義、恐ろしさを考えさせられる機会となった。

ラトビアの首都リガはハンザ同盟都市として栄えていたように、旧市街地もゴシック、バロックなどの建築様式もあり、中世ドイツの面影が色濃く残っているようだった。また、企業訪問の際、多少のタクシートラブルはあったものの、街の治安も良く、晴天にも恵まれ、世界遺産である旧市街地の歴史を感じることができた。

Skype 発祥の地として知られるエストニアについては、やはりバルト3国の中でも特にIT先進国として地位を確立していることを確認す

ることができた。ブロックチェーン技術を活用した「X-Road」は、まさに同国の電子政府を実現するものであり、国民の約98%がIDカードを所有し、使いやすさと信頼感をもって積極的に使用している。これは、今後日本にとってもマイナンバーとブロックチェーン技術の活用におけるモデルケースになることを感じた。

2. 企業訪問について

今回、多くのスタートアップ企業を訪問したが、共通して言えることは、国内だけでは市場が小さいため常に国外に目を向けていること、そして国と企業が一体となって事業を推進していることである。どの国の政府もスタートアップ企業の支援として、例えば税金面などで優遇措置を講じており、若い企業の未来に投資している。その環境もあって、若いCEOが多く、従業員も活き活きと働いている。また、仕事に対しても真面目で、さらに他国を受け入れようとする姿勢を強く感じた（ロシアに対してはやや異なるが…）。

3. 最後に

これまで、バルト3国は観光としてのランドマークやお土産など馴染みがなく、なかなか訪れるチャンスがなかったが、今回視察を通して人も街も非常に魅力的に感じた。ソ連（ロシア）から独立して約30年が経過し、国家としてもビジネスとしても確立する中で、今後日本とも様々な場面で関わっていくように思える。

最後に、バルト3国訪問の機会をいただいた東京経営者協会ならびに団長・団員の皆さま、近畿日本ツーリスト、通訳、訪問先企業の皆さまに感謝申し上げるとともに、今後この経験を活かし日々の業務に取り組むことで、社会や弊社事業に貢献していきたい。

欧州企業視察団に参加して

清水建設（株） 村田 泰崇



欧州を訪れるのは今回が人生初であり、不安と期待が入り混じる中での参加であった。ドイツ経由でリトアニアのビリニュス空港に到着したのは現地時間の午前0時。総移動時間は17時間。なぜこんなに苦しい思いをして、日本人は何度も欧州へ行きたいと思うのだろう。もう二度と行きたくないというのが初日の率直な感想であった。

1. リトアニア

翌朝から特命大使との会食という貴重な時間を設けていただいた。大使から国内情勢の解説として、低賃金であるため、毎年約5万人ペースで若者が国外に流出していく状況であり、地場産業の活性化と国外の産業の呼び込みが急務であり、日本の地方と共通する問題を抱えているというお話が印象に残った。市内視察では、ポーランドの占領時代の臨時首都カウナスと湖と古城の街トゥラカイ、現在の首都ビリニュスを見学した。街中は旧ソ連時代の殺伐とした建物と、欧州らしい色とりどりの建物、シンボルとして置かれる教会とがうまく織り混ざりあい、これまでの歴史を感じる景観を目にすることができた。街を離れると、林と畑、湖に囲まれ、北海道に來たと錯覚するような広大な景色が見られた。日本人に対して好意的な人が多く、食事のボリューム以外は安心して旅が続けられる国である。企業視察では、同国の経済副大臣まで対応して頂いた。コンパクトな国ならではの、産官一体となって経済外交に力を入れている姿が印象的であった。

2. ラトビア

バルト3国の中で最も古い歴史が残る。静かなリトアニアから一変、ラトビアの首都リガは港町で商業もさかんだことから、商売で成功した富裕層の派手で個性的な建物がいたる所に建ち並び、観光客も多く、賑やかな街であった。ロシア人が多く移り住んできた歴史があり、リガの市

民は、ラトビア語、英語、ロシア語の3カ国語を話せることが多いという。様々な宗教施設や銅像もあり、色々な文化が共存していることを肌で感じ取ることができた。また、この多様性を受け入れる国民性は、企業視察でも感じる事ができた。

3. エストニア

3国の中で最も先進的な国で、歴史的な建物を残しながらも、通りを一本挟むとショッピングセンターや高層ビルが建ち並ぶ。古い建物もきれいにリノベーションされていて、街全体を再開発したような印象を受けた。電子行政など新しい技術を積極的に取り入れるなど変化に柔軟な国民性が見られ、ソ連時代の文化から完全脱却し、新しい国として生まれ変わろうとする思いが溢れ出ている国であった。

4. 最後に

小さい国土で資源が少ないという日本と共通する点を持つ国々の視察ではあったが、各国スタートアップ企業でも、EU諸国や中央アジアなど国外へ進出し、ビジネスを拡大している企業が多い。その背景には、専門的なスキルや多言語を身につけた人材の活躍があり、規模は違えども、近い将来の日本のあるべき姿を垣間見ることができて、非常に良い経験になった。また、欧州の美しい景色や文化、様々な人々に触れる中で、自分の視野の広がりを感じることができたため、最終日には名残惜しく、初日に感じた移動の大変さを忘れて、また欧州に行きたいと強く思っていた。

最後に、今回の貴重な機会を設けていただいた東京経営者協会の皆様及び視察先企業の皆様、近畿日本ツーリストの皆様、濃厚な時間を共に過ごさせていただいた根本団長をはじめ団員の皆様、快く送り出していただいた職場の皆様へ心より感謝申し上げます。

新たな財産を得た9日間

東日本旅客鉄道（株） 山崎 俊佑



大学での第2外国語としてフランス語を選択していたこともあり、私にとっての欧州は、ロマンス語圏の国々が第一のイメージであった。今回のリトアニア・ラトビア・エストニアへの企業視察団は、私にとって初めての東欧探訪であり、実に多くの発見があった。

私の中では「欧州＝キリスト教の国々」であった。しかし、バルトの国々には自然崇拝の多神教が土着の宗教として古来存在し、その色彩が今なお強く残っていた。自然の事物に神々が宿るという多神的な考え方は日本の神道に似通うところがある。実際に、バルト3国の気候風土や情景は、山と温泉がないことを除いては、日本のそれに近いものを感じた。また、リトアニアでは広くキリスト教が浸透しているものの、キリスト教の祭典を土着の祭典に結び付ける様々な風習があるほか、人々の氏名も古来の文化に由来する名前とキリスト教に由来する名前の2通りがある。エストニアでは、「特に宗教はない」と考えている人の割合が約7割に達するとのことである。

当然ながら、日本との違いも多くある。バルトの国々は山のない平坦な国土である。エストニアのガイド・通訳の方が、日本を訪問した際に最初に感動したこととして、日本の山並みを挙げるほどである。また、バルトの国々は長い間、旧ソ連などの外国勢力に支配されていた。企業の方々の話を聞いたり、行く先々の史跡を観たりすると、自国のアイデンティティ、独立や自由の尊重という価値観は日本以上に強いことがうかがえた。

ビジネス環境としては、英語の通用度が非常に高いことが肌で感じられた。3国とも人口・面積が非常に小さいため、国外市場へのアクセスが重要であり、多くの人々

が英語をはじめとした外国語を習得している。仕事に対して勤勉な国民性でも知られている。そして、政府を含め、様々な場面で電子化やデータベース化が進められており、結果として、透明性の高い行政やビジネス環境が整備されている。日本で「海外展開」というと、市場規模などの観点から、G7などの先進諸国か、中国、インド、東南アジアへの進出を耳にすることが多い。今回の訪欧を通じて、バルトの国々も選択肢のひとつとなり得ることを体感できた。EU市場にあって、日本に近い風土・文化がある。「命のビザ」で知られる杉原千畝氏の外交遺産もあり、親日的でもある。日本企業にとってビジネスの拠点としやすい環境であり、EU市場を開拓する際のパートナー探しなど、様々なメリットが考えられる。

私個人にとっても非常に意義深い経験となった。子どもが小さい中で欧州まで個人的に旅をすることは難しい。個人旅行をしたとしても、現地の企業で働く人の声を聴くことはまずない。8カ所の企業・施設を訪問し、外国の方々とビジネスについて意見交換する中で、仕事や人材、情報に対する彼らの価値観・考え方などを生の声として聴き、多くの刺激とインスピレーションを受けた。

最後に、この企業視察団を成功に導いてくださった東京経営者協会事務局の皆さま、旅行代理店のご担当の皆さま、添乗いただいた横山氏、そして団長・団員の皆さまに御礼を申し上げたい。そして、職場を不在にするにあたり様々な支援をしてくれた職場の同僚、視察団への参加という投資をしてくれた会社に感謝し、企業視察団で得た有形無形の財産を活かしていきたい。

バルト3国視察雑感

(一社) 東京経営者協会 海老澤 大造



これまでバルト3国といえば元大関の把瑠都(バルト)とICT先進国という程度の知識しかなく、またご参加された団員の方々も初めてということで、一抹の不安があったが9日間事件・事故・病気もなく、全行程を無事に終えることができた。リトアニアのビリニュスにある「夜明けの門」で強い雨の為、車窓からの視察となった以外は天候にも恵まれ、効率的な視察をすることができた。

今回の視察のメインテーマは、世界的にICT先進国といわれるバルト3国において、人材育成や企業の生産性向上施策、また訪問先の経営・労働事情について探るとともに、ICT技術を用いて効率化された国民の生活事情を見聞することとであった。

バルト3国と一括りにされるが、実態は言語、宗教も違っている。人口は3国合わせて600万人程である。

バルト3国は、ナチス・ドイツと、旧ソビエト連邦の両側の強国から酷い目にあってきた。第二次世界大戦中はナチスに支配占領された。

大戦終焉後は再度冷戦のなか、スターリン時代のソ連体制の支配下におかれ、文化も言語も奪われた。何の罪もない多くの人たちが逮捕され、シベリアに抑留された小国の悲しみの歴史を持つ。各国でのガイドの口々からそれらの話が出てきた。

結果として1991年9月に3国はソ連からの独立を果たすこととなった。その発端とも言える出来事が1989年8月23日に起こった「人間の鎖」であった。

リトアニアの首都ビリニュスから、ラトビアの首都リガを経て、エストニアの首都タリンまでの距離およそ600キロメートルを、200万人の人々が手を結び、連帯と独立への意志を歌い続け、バルトの人々の独立への強い意志を全世界に示した。東京起点で考えれば大阪を超え、兵庫県に至る距離である。それを非暴力で勝ち取ったことは世界に知られている事だ。

リトアニアでは在リトアニア日本国大使館、特命全権大使の山崎史郎(やまざき しろう)氏及

び同二等書記官の井上裕也(いのうえ ひろや)氏からリトアニアの一般事情をはじめとして、外交・経済・2国間関係についてブリーフィングを受けた。

リトアニアで印象に残ったのは、昨年映画化された杉原千畝さんの話である。第二次世界大戦初期に行き場のなくなった1,600人のユダヤ人にビザを発給し、6,000人以上の命を救った。リトアニアを離れる列車の中でもビザのサインを続けたという。その後、これが元で外務省を辞された後、20年後にその功績が世間に明るみになった。

今回の視察団参加が決まって最も興味がわいたのはエストニアである。

エストニアのショウルームでは政府の電子国家の取り組みを伺った。日本でも起こっている事だが、ICT化によってこれまでのアナログ的な業務がデジタルに置き換えられ、仕事が失われる事と業務が効率化し企業側から見れば収益が増大するという、相反する選択の落ち着きどころがどこなのか。人口が少ない国家だから出来るのか、あるいはそうではなく、今後はICT技術を使って効率的な国家運営に向かうべきなのか考える機会となった。

エストニア政府が電子政府の取り組みを進めるにあたり重視しているポイントは、「教育」「使いやすさ」「信頼」の3つという説明であった。

バルト3国は今回の団員全員がはじめての訪問だった。ICTの先進国として世界からも注目されている。今年の年初に安倍総理も訪問された。バルト3国同様に資源の少ない日本も学ぶところが多々あった。

現在各国とのICT技術を使った日本企業とのプロジェクトも進んでいるとの話も伺って来た。今後バルト3国との連携も深まっていくことと思われる。

いずれにしても、産業・文化・暮らしぶりとして色々と勉強になる視察であった。

今回は、かなりスケジューリング的には厳しい視察団だったが、団長をはじめ、団員の皆様、添乗員の横山さんのお人柄を含めたご協力により、無事に視察を終えられた事に感謝する。

第 40 回東京経協欧州企業視察団報告

発行 2018 年 12 月
発行所 一般社団法人 東京経営者協会
電話 03 - 3213 - 4700